

キミばあちゃんの椿つばき

「こんにちは、キミばあちゃん。」

裕介たちの学校では学期に一回、近くの一人暮らしの老人を訪問している。キミばあちゃんは今年七十八歳。長い間、大学で国文学を教えていたそうだ。大学の先生というと、気難しそうに思われがちだけど、とても気さくで話好きである。

「よう来てくれたね。美紀ちゃん、佐織ちゃん、順ちゃん。あれ、裕ちゃんはいないのかい。」

訪問も三年目になって、キミばあちゃんを訪問して元気づけるというよりも、裕介たちの相談相手になってくれている。

「裕介ね。また入院したんだ。しばらくかかるらしい。昨日寄ってみただけど、あいつあんまり喋らなくて、黙っているのも気づまりで、せっかく行っただけど、すぐに病室を出てしまったんだ。……どうしたらいいのかなあ。」

順平が助けを求めるようにキミばあちゃんの方を見た。キミばあちゃんもすぐに順平の気持ちを察したようだ。

「難しいなあ、順ちゃん。でも心配している順ちゃんの気持ちは裕介にも分かるよ。」

それから四か月がたち、最後の訪問日となって、四人はそろってキミばあちゃんの家に行った。

キミばあちゃんは、みんなの顔を見るなり、すぐに裕介に調子はどうかと尋ねた。

「ここんとはまあまあなんですけど。すぐに具合悪くなっちゃうんで……。」

と、裕介は寂しそうに答えた。

「裕ちゃん、一人で悩むと落ち込むよ。裕ちゃんには心配してくれる友達もいるんだからね。」

と、キミばあちゃんは、裕介の背中をポンとたたいた。美紀も佐織もそうだとするうようにうなずいた。

「うん。元気になるっていつも自分に言い聞かせているんだけど。ときどきね、……苦しくなるんだ。」

「苦しくなるって。」

「ずっと一生こんな風に病院を出たり入ったりするのかな、と思うと……。」

キミばあちゃんは、裕介の肩に手を置いて座らせ、優しい目で次の言葉を促した。

「親にも心配や迷惑ばかり掛けて心苦しいし、何のために生きてるのかな、生きていても仕方がないのじゃないかと思ったりすることもあるんです。」

いつもは感情をあまり表に出さない裕介の聲が、震えているのに気付いた順平は、驚いて裕介の側そばに寄った。

「そうかい。」

キミばあちゃんは穏やかに言うと、立ち上がった。

隣の部屋から何冊かの本を手に戻ってくると、一冊を開いて裕介の前に置いた。そのページにはしおりがはさんであつた。

「裕介、この本は、『広瀬淡窓』たんそうと言う人のことが書いてある。七十五歳まで生きたんだけど、とても病弱だった人なんだよ。その淡窓が二十三歳の時に倉重湊くらしげなむらという医師に宛てた手紙と、その後のいきさつが書いてあるから読んでごらん。」

裕介は本を手に取った。

「生来、多病の私ですが、今最も憂えているのは、何を目標に生きて行けばよいかということです。幼い時から勉強に励んで来たことを生かして身を立てる以外にないように思うのです。そうするなら、どこかの藩に仕官するか、都へ出て自分で塾を開くかだと思っております。しかし、病気がちの私には務まりません。この日田で教師となることも考えましたが、この地で儒者として成功した人はいません。私も数年来、生徒を集めて教えていますが、とても生計を立てられるほどには人は集まりません。医師になることも考えたのですが、長い修行も必要ですし、だからといって農工商売もたやすいことではありません。どうすればよいのか悩んでいます。どうぞ解決の良い方法を教えてください。」

ところがなかなか返事が来ないので、待ちきれなくて淡窓は倉重に会いに出掛けて行った。

「確かに手紙は読んだ。趣旨はともかく、同じことをくどくど繰り返して、愚痴や恨み言ばかり並べて見苦しい。君の行くべき道はただ一つしかなく迷いようがないではないか。君の得意な分野で生きて行くことだ。教師では食えないと言うが、それはまだ真剣に教えていないからだ。私の見るところでは、まだ工夫や努力が足りない。不健康を理由に、だからだらした生活を送るならば、父母への最大の不孝だ。迷うことなく、ただ一筋に教師の道を進むべきである。」

倉重のこの言葉で、淡窓はこれまでの判断しかねていた気持ちに吹っ切って塾に専念することにした。

裕介は、ここまで読んで顔を上げた。キミばあちゃんが湯飲みを両手に包み込むように持ってこちらを向いている。順平は少し心配そうな顔つきで見ている。裕介は、広瀬淡窓はこの後どうしたのだろうという思いがわき上がって来た。そして病気はどうなったんだろうという思いも消えなかった。

「淡窓は、江戸時代に今の大分県の日田に『咸宜園』^{かんぎえん}という塾を開いたんだよ。『咸宜園』^{かんぎえん}というのは『みなよろし』という意味だね。身分にかかわらず、みんな勉強しに来なさいということなんだ。日本中から塾

生が集まってきたんだよ。

淡窓の病弱は治ったわけではない。いつも体中のあちこちに痛みがあつて、そのために何ヶ月も寝込んだんだよ。なかなか辛抱できないような痛みも耐えて、懸命に頑張ったんだ。まあ、言ってみれば、病気をすればするほど少々の困難にはびくともしない精神的な強さを身に付けたんだろうね。自分だけが何でという思いもあつたとは思うけど。それを何かのせいにせず、前へ進もうとしたのが広瀬淡窓なんだよ。

あれあれ、ちよつとお説教臭くなつたかねえ。それなら、一つ面白いものを見せよう。淡窓のチャレンジだよ。」

キミばあちゃんは、黒と白の丸がずらつと並んだコピー用紙をみんなに配つた。右上に万善簿と書いてある。

「まんぜんぼ。」

四人が一斉に声を上げた。

「そう、『万善簿』と言つてね。淡窓が、今日から一万個のよいことをしようとした帳面なんだ。い



いいことをした時は白丸。悪いことをした時は黒丸。たとえば、生き物を大事にしたという時は白丸。体に悪いことをした時は黒丸。毎日帳面につけて、白丸と黒丸を計算して、今日は白丸がいくつ残ったというようにつけるんだ。私が一番好きなのは、黒丸が十個も書いているところ。何をこんなに悪いことをしたのかと書いてみると、『権藤生 死す』とある。権藤さんという塾生が亡くなったんだね。そして、『介抱不行き届き』と書いてあるんだよ。自分のところに来ている塾生が死んだからといって、これだけの黒丸を連ねているんだよ。気になって、帳面の少し前を見ると、今日は権藤生を見舞った。白丸一つ。今日は権藤生を見舞うつもりだったがいけなかった。黒丸一つと書いてあるんだよ。自分が病人なのにね。それでも、権藤さんが亡くなった時には、黒丸をいくつも連ねずにはいられなかったんだね。人柄が分かるね。」

「すごい人がいたんだね。とっても僕は広瀬淡窓とかいう人のようになれないだろうけど……。甘かったんだね。キミばあちゃん、ありがとう。」

祐介は、キミばあちゃんの手を取ってぐっと握りしめた。

「裕介、僕らも万善簿、いや、百善簿くらいやってみるか。」

美紀と佐織は、私たちもやってみようと言い出した。そして、庭を指差した。

「庭の椿がきれいだね。美しいものを美しいと思う、この気持ちに白丸一個。」

と、すまして言うと、キミばあちゃんは、窓を開けた。

「きれいだろう。あの椿。あれはね、冬の寒い中でもきれいな花を咲か



せる。そして、椿は最後の最後まで生き切る。だから私は好きなんだよ。あんな風に生きたいと思っているよ。そうそう五所平之助さんという人が詠よんでいる句があつてね。『生きることは一と筋がよし寒椿』、いいねえ。」